

二〇二五年度入学試験問題

A
|
1

国語

(一〇〇点 六〇分)

《注意事項》

- 一、試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはならない。
- 二、この問題冊子は全部で11ページである。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあった場合申し出ること。
- 三、解答には黒鉛筆又はシャープペンを用い、色鉛筆、万年筆などを使用してはならない。
- 四、解答用紙は1枚(表と裏)である。
座席番号(数字)、氏名を解答用紙の指定欄に記入すること。
- 五、この問題冊子の余白は、自由に利用してよい。
- 六、試験終了後、この問題冊子は持ち帰ること。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(なお、出題の都合上、文章の一部や小見出しを省略するなどの改変を施している。)

人新世という言葉聞く機会が多くなりました。もともとは英語の anthropocene の直訳で、anthro- の部分はギリシャ語の人類を意味し、cene は新しいという意味を持つ造語です。日本語では「じんしんせい」と読むことが多いですが「ひとしんせい」と発音する人もいて混乱しています。カタカナ表記でも「アンソロポセン」とか「アンソロポシオン」と呼ばれます。これは、まだ一般用語として定着していない証拠なのでしょう。日本では近年注目されるようになった人新世ですが、最初に提唱されたのは二〇〇〇年のことで、まさに二一世紀に登場した概念と言えます。

人という言葉が入っていますから人類学の用語のように思われますが、もともとは地質学の用語です。提唱したのは大気化学学者で、オゾンホールの研究の業績で一九九五年のノーベル化学賞を受賞したオランダ人のパウル・クルツツェンです。二〇〇〇年に開催された「地球圏・生物圏国際協同研究計画 (IGBP)」の会議の中でクルツツェンが、「我々は完新世という言葉を使っているが、もはや『人新世』に入っているのではないか」と発言したことで、この言葉が広く知られるようになりまし。ちなみに「完新世」はいまから一万一七〇〇年前に始まり現在まで続いている時代区分です。完全に新しい時代という意味で、地質学者も人類学者も、この時まではその先の地質年代を考えてはいませんでした。

人新世は、**A** に大きな影響を及ぼすようになっているので、新たな地質時代を定義する必要がある、という認識から提唱されました。ただし、⁽¹⁾ その始まりをどこにするのか、という点には議論があります。この概念を地質学だけに限定すれば、地球規模での人類の活動を確実に証明できる時点を開始期とすべきですが、人新世は人類活動全体を見直すという視点から、地質学だけではなく人文社会科学の分野でも言及されるようになったことで議論が① フクザツ になりました。実際、クルツツェン自身も、地質年代を見直すこと自体にはそれほど意義があるわけではないと述べています。人類の活動が地球に及ぼす影響を及ぼしているかを自覚してもらうため、そして最悪の事態を避けるにはどうすればよいかを考えてもらうために提唱したと言っています。このあたりの事情が「正統的」な地質学者には受け入れがたいところがあり、地質

学の専門家には当初からあまり評判の良くないものでした。しかし、二〇二三年の七月には国際地質科学連合（IUGS）の国際層序委員会から、人新世の標準地質断面（セクション）をカナダのトロント郊外にあるクロフォード湖にするという勧告がなされました。いよいよ人新世は用語として正式に認められるところまでできたのです。

人新世は、最初は大気中の温室効果ガス、とりわけ二酸化炭素とメタンの濃度上昇が開始したイギリス産業革命後の一八世紀後半の人間活動の影響と関連付けられました。人類学の立場からは、人間が自然の恵みにのみ頼っていた^②狩猟採集社会から、環境に働きかけて食料を得るようになった一万年ほど前の農業の開始期をそのスタートと考えるという解釈も成り立ちます。しかし、研究が進んでくると、一九五〇年以降に地球環境が大きく変わったことが明らかになってきました。世界の人口はこの間に二〇億人から八〇億人にまで増加しました。短期間に四倍となったのです。人間活動もそれに比例して増加し、およそ四倍に増えています。これが大気二酸化炭素濃度の上昇と、表面気温の顕著な上昇をもたらし、地球上のあらゆる場所に人類が生み出した様々な化学物質を拡散させることになって、その痕跡を認めることができるようになったのです。

この人間活動の^③キユウゲキな拡大は「グレートアクセラレーション」と呼ばれ、人類の活動が新たな段階に入ったことを示しています。そのため、一九五〇年が一般に人新世の始まりとされています。クロフォード湖が選ばれたのも、一九五〇年代の地層がはつきりと認められたことが決め手になりました。しかし個人的にはアメリカ・ニューメキシコ州で人類最初の核実験が行われた一九四五年七月一六日にするのが適当であると思います。同年の広島、長崎への原爆投下と、それに続く核実験は地層に地球規模で核物質の明確な「B」を残したという意味で、人新世の始まりを告げるものとすべきでしょう。それを避けたのが核保有国に対する忖度^{そんたく}だとしたら残念です。

このような経緯から、人新世という言葉は、人類活動が悲劇的な結末を迎えないようにするための提案という側面を持ちます。その根拠を示すものとして、地球システムを研究するスウェーデンの環境学者ヨハン・ロックストロムとオーストラリアの化学者ウィル・ステフェンが二〇〇九年に発表した「プラネタリーバウンダリー（地球の限界）」に関する研究があります。地球をシステムとして捉えると、ある範囲の中では、恒常性を維持するフィードバックが働いていますが、そこ

には引き返しの不能なポイントがあり、それを超えるとシステムは予想がつかない振る舞いをするという仮説です。彼らは以下の九つの項目、(一) 気候変動、(二) 大気エアロゾルの負荷、(三) 成層圏オゾンの破壊、(四) 海洋酸性化、(五) 淡水変化、(六) 土地利用変化、(七) 生物圏の一体性、(八) 窒素・リンの生物地球化学的循環、(九) 新規化学物質について、具体的な限界値を提示しました。残念なことに、いくつかの数値で既に閾値を超えています。気候変動に関しては、大気中の二酸化炭素濃度について、限界値の下限が三五〇ppm、限界値の上限が四五〇ppmに設定されていますが、現在の世界の二酸化炭素濃度は、四〇〇ppmを超えており、世界全体でさらなる増大を食い止めなければならない状態にあることが分かります。

以上をまとめると、概ね一九五〇年代に始まる世界人口の拡大とそれに伴う人間活動の増大によって、資源の消費と④ハイキ物の増加が進み、地球規模の痕跡を残すことになりました。そして同時に環境が後戻りできない形で変化しているということになります。この時代を新たに定義したのが人新世というわけです。これを資本主義の帰結とみて、社会全体の変革が必要だという意見もあります。私たちは地球の資源を消費しながら生活を営んできたわけですが、今までのやり方が通用する最後の世代なのでしょう。それをどうするかということを実際に考えなければならぬ時代になった、ということです。

人類史から人新世を見るとどのようなことが言えるのかを考えてみましょう。人間はこれまで、移動によって問題を解決してきました。環境が悪くなれば動いていく。最初は、アフリカから出て誰もいないところに広がっていき、地球上にくまなく広がった後は、集団同士の衝突が起きて移動する。農業を始めると土地に縛られるので、その解決法も荒っぽいものに変わっていきました。大航海時代以降は移動のスケールも大きくなり、現在でも移民や難民という形で移動によって問題を解決しようとしています。しかしグレートアクセラレーションは、それを不可能にしつつあります。人新世は、人類史で見ると初めて、**C**時代ということになります。この先に行くとしたら宇宙しかないということまで来て、ものを考えなければいけなくなった初めての時代なのです。

人新世を定義した後には完新世を見直すと、この時代までは人間が自分たちの活動で自分たちの首を絞めていると意識する

ようなことはなかったのだと総括することになるでしょう。言葉ができて初めて私たちは状況を認識できるようになります。その言葉を地質学者が造ったというのは興味深いですが、⁽²⁾ 逆に言う人間を対象に研究をしていた人類学者が、そこに時代の区分を作ろうとはしなかったということも考えるべき問題です。人類学者は、ホモ・サピエンスという種が変わったという意識がありませんでした。ホモ・サピエンスは絶滅していませんから、この時代に区切りを付ける必要はないと考えているわけです。しかし、それは本当なのでしょうか。

一九五〇年代は核の時代の始まりだけではなく、DNAの二重らせん構造が解明され、分子生物学がスタートした時代です。その帰結として、現代ではゲノム編集技術の開発によって、ヒトDNAの改変も可能になっています。実際に二〇一八年には中国の研究者、賀建奎（フー・ジェンクイ）が、この技術を使って遺伝子操作ベビーを誕生させています。ヒトの生殖系列の細胞の^⑤人為的な改造は重大な倫理的問題を含んでおり、現状では厳しく制限がかけられています。また技術的にも未熟な部分があることから、すぐに親が望む外見や体力・知力等を持たせた子どもである「デザイナーベビー」が誕生することはないと思います。しかし、すでに他の生物種では、形質改良のためのゲノム編集が行われており、将来的にヒト遺伝病の治療にこの技術が使われるようになれば、その誕生は時間の問題だと考えるべきでしょう。

人新世はヒトが自身のゲノムを自由に改変させて、これまでにない人類を誕生させた時代と定義されるようになるかも知れません。地球温暖化による環境の変化に対応できる遺伝的な改変、などということも考える時代が来るでしょう。その時ホモ・サピエンスという種は絶滅することになります。

ハードウェアとしてのホモ・サピエンスは、今から二〇〜三〇万年前にアフリカで完成しました。脳容積も今と同じですし、生物としての能力、例えば筋力であるとかは、むしろ昔のほうが優れていたと考える人も多いのです。私たちはその頃にできあがったハードウェアを使いながら、社会を作り生活を営んできました。最初のホモ・サピエンスが使っていたソフトウェア（OS）は、少数のグループが生存していくために適したものだっただけです。しかし集団が大きくなると、同じソフトでは維持できなくなり、例えば文字や道徳、神話や宗教、音楽など、いろいろな文化的要素を加えていきました。そうやって大きくなる集団をマネジメントしたのですが、一方で、そのソフトは敵と味方に分けて集団を安定させる仕様に

なっていました。今はそれが行き詰まった状況なのでしょう。小手先のバージョンアップでは現状に対応できなくなっています。

ハードウェアすら改変できるようになったときに、OSがそのままということは考えられません。人新世を生きるためのシステムを構築する必要があります。個人的には、それは可能だと思っていますが、これまでの経緯から社会の有り様を根本的に変えられない。(3) それが今、私たちに突きつけられた最大の問題なのでしょう。人新世は地球の危機、環境の危機、人類生存の危機の時代を表す用語です。どうしても暗い話になるわけですが、暗い話の解決は明るい未来につながっているはずです。それが描けるかどうかは、科学がその役割を果たすことができるかにかかっています。更に、人新世のOSを構築するためには、トランスディシプリナリー(超学際的)な取り組みが必要になるはずです。文理^⑥融合といった学際的な取り組みを超えて、更に宗教や政治も巻き込んだ検討が求められています。その中で人類学が蓄積してきた知見をどのように生かすことができるのか、それがこれからの人類学に突きつけられた課題です。

〈篠田謙一『科博と科学―地球の宝を守る』に拠る〉

問一 二重傍線部①～⑥について、カタカナを漢字に改め、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

問二 空欄Aにあてはまる語句を本文中より八字で抜き出して答えなさい。

問三 傍線部(1)「その始まりをどこにするのか、という点には議論があります」について、本文で挙げられている「人新世」の「始まり」についての議論を四つ答えなさい。

問四 空欄Bにあてはまる二文字の漢字を、Bが含まれる段落より後の段落から抜き出しなさい。

問五 空欄 **C** にあてはまる語句を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 集団同士が衝突しなくなる
- イ 移動によって問題を解決する
- ウ 新たな行き先がなくなった
- エ 人類活動の痕跡を残さない
- オ 地球上で利用可能な場所を探し当てる

問六 傍線部(2)「逆に言うと人間を対象に研究をしていた人類学者が、そこに時代の区分を作ろうとはしなかったということも考えるべき問題です」について以下の問いに答えなさい。

I 「そこに時代の区分を作ろうとはしなかった」について、何の時代と何の時代の区分を作ろうとはしなかったのか、「区分」に続く形で十五字以内で説明しなさい。

II 筆者が「人類学者」が「そこに時代の区分を作ろうとはしなかった」ことを「考えるべき問題」とするのはなぜか。「そこに時代の区分を作ろうとはしなかった」理由も含めて九〇字以内(句読点を含む)で説明しなさい。

問七 傍線部(3)「最大の問題」とは何か。本文の内容に即して五〇字以内(句読点を含む)で答えなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（なお、出題の都合上、小見出しを省略するなどの
改変を施している。）

山に登ると、空が広い。谷風が山を駆け上がってくれば、上昇気流で冷やされた水蒸気が湧きたつように雲になり稜線に現れる。次々と形を変える雲の姿は、いつまでたっても見飽きることがない。雲の形は **A**、変幻自在である。時にそれは人の顔のようであり、別の雲は動物の姿のようにも見える。また時には、太陽の日差しと相まって、神秘的で息を飲むような光景を作り出す。それは、ただの偶然、あるいはただの幸運なのだろうが、そこに「神の啓示」を見る人がいても理解できることである。次々と変わっていく雲の形に何を見るかは、その人次第であり、それを誰も否定することなどできない。

我が家の愚犬は台所に人がいるとパトロールに来る。そのきつかけは、ある朝彼に訪れた幸運だ。その日、妻が子供のお弁当を作っていたのだが、誤っておかずの卵焼きを床に落としてしまった。彼が喜び勇んでその卵焼きを平らげたことは言うまでもない。それからというもの、彼は誰かが台所に行くとき必ずついてくるようになった。以前は台所に入ると怒られるので、恐る恐るという感じだったが、今はなにかのルーティーンのように必ずついてくる。もちろん変な **①** クセがついてはいけなないので、こちらも台所で食べ物をあげるようなことはしない。しかし、かれこれ2〜3年にはなろうかと思うが、彼は毎回台所についてきて、決してその努力を惜しまない。その彼の努力は本当に数えるほどではあるが報われた。ある時、僕は温泉卵を作っていたのだが、卵をお湯から取り出そうとして、そのあまりの熱さに手を滑らせた。 **a**、ある時、妻が冷蔵庫から卵パックを取り出そうとした時に、そのうちの一つがころげ落ちた。温泉卵に、生卵だ。大戦果である。

人の努力というものは、どこかこの話と似ている所があるような気もする。何かを成し遂げるためには必ず努力が必要だが、多くの場合、努力をすればそれが叶うというふうには、この世はできていない。報われない努力や涙は、この世に溢れている。 **b**、努力をコツコツ、コツコツ続けていると、時々 **(1)** 「卵焼き」が落ちてくるのだ。それは「運」とか、「チャンス」といった言葉で形容される代物である。それがいつ来るのか、あるいは本当に来るのかがあるのかすらわからない。

ただ、それがいつ来てもいいように常に準備していることが肝要なのだ。彼は、それを② 怠らなかつた。

少し話は変わるが、学生の時、研究室の教授が麻雀好きでお強く、時々ご一緒させて頂いた。先生は麻雀に勝つとご機嫌で「麻雀の方が将棋より高級なゲームなんや。わかるかな」というようなことを言って、よく僕をからかっておられた。当時、僕は麻雀なんて偶然の要素が大きいし、所詮はギャンブル。将棋より高級な訳がないと思っていたが、この歳になって、あながち先生はそれを冗談で言っていたのではなかったのかもしれないと思うようになってきた。

将棋は、盤上にすべての情報が開示されており、有限確定完全情報ゲームと呼ばれるカテゴリーに属する。極論すれば常にその局面の最善手、すなわち正解がわかっているゲームだ。現時点では初手から終局まで最善手を続けることができるA Iも人間も存在しないが、基本的にはより深く先読みできる人が強い。つまりその人が持つ資質・能力や訓練度のようなのが大きく勝負に作用する。一方、麻雀は有限不確定不完全情報ゲームに属し、次にどんな牌を引いてくるか、相手がどんな牌を持っているのか情報が開示されていない。だから、いくら才能があろうが、どんなに訓練していようが、ある局面での100%正しい最善手を言い当てることは原理的に不可能である。確率的に有利なはずの選択が、実際には裏目に出てしまうようなことは日常茶飯事であり、偶然が支配する非合理性、不条理さを内包している。C 何が最善なのか厳密には誰にもわからない状況で、何かを選択しないといけないゲームである。確かにこの意味で、麻雀は将棋よりも最善手を探すが難しいゲームと言えないことはない。

このことを少し違う言い方をすれば、正解がある問題には、正解へとたどり着く「理」があり、それを発見できるかどうかは個人の才知や努力に依存しているが、いったん見つけた「理」に従う選択には迷う余地がない。しかし、何が正解か原理的にわからない問題は、従うべき確かな「理」もなく、拠って立つべきものがない。それは、確率のようなおぼつかない「理」と、揺れ動く自分の感情、恐怖心とのせめぎ合いの中で何かを選んでいく作業である。本当に大事な選択になれば、単なる頭の回転のような才だけでは③ コウしきれないプレッシャーと恐怖が襲いかかってくる。頼るものがない世界で、自分が問われるのである。

そして重要な点は、この世を生きていく上での選択の多くが、実は将棋的なものより麻雀的なものであるということだ。

もちろんどんなものにも道理はあり、努力により成功の確率は上がる。単純に将棋的とか、麻雀的といった区分けをするのは不適切で、その多くは中間的なものであろう。しかし、何が最善なのか厳密には誰にもわからない、不条理さを内包しているという点において、⁽²⁾この世は根源的に麻雀的であるように思う。決してすべての情報が開示され、論理的に整合性が取れたものばかりで世界が構成されている訳ではない。さまざまな偶然や、時に「政治的」と呼ばれるあまり公正でも合理的でもないものの作用で物事が決まっていく。「オープンな競争の結果だから、自己責任だよ」などと言っても、実際は決して実力のある人、能力が高い人、努力をした人ばかりが成功している訳ではない。偶然と不公正が少なくない部分を支配しており、この世は不条理を内包しながら存在している。

時々、偶然とは何なのだろうと思うことがある。この世で人が行う判断の多くは、運を天に任せるしかない部分があるが、運が良いとか悪いとか、ツキがあるとかないとか、そういうものが確かにあると、僕は思う。古代の昔から人はそういった「突然の大漁」のような幸運、あるいは「事故死」のような不幸、そんな偶然を神の意思のように解釈し、幸運を呼び不幸を避けるように祈りを捧げてきた。世界中のどんな民族にも、そういった原始的な信仰はあり、それは⁽⁴⁾タダヨい移りゆく雲の形に、人の顔や動物の姿を見る行為と同じものなのかもしれない。しかし、どこか人の心の奥深くに、何か響くものを持った行いのようにも思う。それが何なのか。そこに神の啓示を見ようが見まいが、AIで再現できるランダムネスと同じものであるうがなろうが、いずれにせよ、人には制御できないものである。やれることをやったら、あとはその捉えどころのないものに身を委ね、どんな結果もただそれを受け入れるほかに、人は術を持たない。そしてそれは、願いが叶うこともあれば、時に「どうしてこんなことが」と思うような不条理で嫌なことが人生で起こってしまったも、耐え忍ぶしかないことを意味している。それが「**B**」ということなのだろう。

これと関係あるのか、ないのかわからないが、鶴見俊輔氏が「知識人の戦争責任」について語っていた言葉を、僕は印象深く思い出す。彼の言によれば、過去の大戦の時、知性と教養を持った「有能な人」は⁽⁵⁾時勢に即してころころと言うことや立場を変え、それを正当化した。合理性は状況が変われば変化するものであり、「理」を求めることは、変わる状況に応じて「節」を曲げることにつながる性質を持っている。一方で「戦争反対」と同じことしか言わない人の考えは揺らがない

かった。彼はそれを「^③節操がある人」と表現している。

何が最善なのか誰にもわからないこの世界を生きていくために、またその不条理さの恐怖と向き合うために、助けとなるものがあるとしたら、それはそういう「節操」のような覚悟を伴った、あるいは何かにへばりついているとでも形容されるような、心の在り方かもしれないと思うのだ。自分が本当に大切に思うことは、目先の損得や状況の変化に^⑥惑わされず、ずっと揺らぐ心を持ち続けること。^④絶えずそれに向けた努力を続けること。そうして「卵焼き」が落ちてくるのを待ち続けること。それが「信じる」という行為なのだと思うている。

〈中屋敷均『わからない世界と向き合うために』に拠る〉

問一 二重傍線部①～⑥について、カタカナを漢字に改め、漢字はその読みをひらがなで答えなさい。

問二 空欄 ^①a ^② ^③d ^④ にあてはまる言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア また イ つまり ウ しかし エ そして オ では

問三 空欄 ^①A ^②B ^③ にあてはまる言葉をそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

A ア 切磋琢磨 イ 才色兼備 ウ 融通無碍^げ エ 明鏡止水 オ 古色蒼然

B ア 人事を尽くして天命を待つ イ 蓼食^たう虫も好きずき ウ 薄氷をふむような思い
エ うそから出たまこと オ 石橋をたたいて渡る

問四 傍線部(1)「卵焼き」が落ちてくる」を言い換えた言葉を文中より二つ、ともに二字で抜き出しなさい。

問五 傍線部(2)「この世は根源的に麻雀的である」とはどういうことか。「将棋的」と「麻雀的」の違いを明らかにした上で一〇〇字以内(句読点を含む)で説明しなさい。

問六 傍線部(3)「節操がある人」の説明として適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 知性と教養を持ち、時勢に即して合理的に自身の立場を変更、正当化できる有能な人
- イ 状況が変われば合理性は変化するが、どんな状況でも理を追求するという考えが揺らがない人
- ウ 自分が本当に大切に思うことを、不条理な状況にあっても、揺らぐ心を持ち続けられる人
- エ 何が最善なのか分からない世界でも、自身を助けるものがきつとあらわれると確信を持つ人
- オ 世界の不条理さを知りながら、最善に向けた努力を続け、最後に「卵焼き」を受け取る人